

失われる「怖れ」について

—— 〈老い〉 をめぐって ——

高山 利 弘

日本文化研究室

Loss of “Fear” :

About “Aging”

Toshihiro TAKAYAMA

Japanese Culture

Abstract

This paper surveys the Japanese literary works describing “aging”, and considers the problem of “fear” about “aging”.

1. はじめに

昨今、連日といってもよいほどに凶悪な事件の報道がなされているが、それら事件についてのわれわれの関心は、ともすると一時的なものになりがちである。それは、そうした事件報道が、多くの場合、自分自身にとっては〈他人事〉であることによるためであろうが、それとともに、あたかもわれわれの記憶に上書きするかのように、次から次へと同様な報道がもたらされるためでもあろう。情報化社会における、おびただしい情報の氾濫は、われわれ人間にとって、それらを記憶にとどめることを困難にするとともに、ひいては情報の価値を選別する能力を麻痺させることにつながるといってもよいのではないだろうか。このことは情報化がわれわれにもたらした一つの「怖れ」としてとらえることができよう。

現代人のかかえる「怖れ」の一つとして、〈老い〉をめぐる問題をあげることができるだろう。むしろ〈老い〉をめぐる「怖れ」は現代に限ったことではなく、過去においてもそれぞれの時代相応の「怖

れ」として意識されていたであろうが、古代においては、〈老い〉そのものを怖れるというよりは、〈老い〉に続く〈死〉の方に重点が置かれていたようである。一般に仏教思想において、〈老い〉は人間の四苦、すなわち生苦・老苦・病苦・死苦の一つとして位置づけられている。すなわちこの世に生を受け、年若い、病を得て死を迎えるという人生そのものが苦しみであるということだが、平安中期に源信によって書かれた天台浄土教の信仰を説いた書である『往生要集』（985年成立）では、人間は「不浄」「苦」「無常」の相があると述べているのみで、〈老い〉については触れられていない。そして「無常の一事は、終に避くる処なき」ことであるとし、死は免れないものと説いている。

人間の四苦としての生苦・老苦・病苦・死苦は、平安末期、平康頼によって書かれた仏教説話集『宝物集』が詳細に記すところであるが、『往生要集』と『宝物集』とを対置させる時、平安中期から末期にいたる段階で、人間の〈老い〉をとらえる視点が生じたと見ることができよう。『往生要集』は後世の思想や文学に多大な影響を及ぼした書であり、『宝物集』にもその影響が顕著に示されているが、『宝物集』は『往生要集』が触れなかった〈老い〉への関心を示していることになる。『往生要集』から『宝物集』にいたる過程で、〈老い〉への視点が生じたと見る場合、『往生要集』以後に成立し、やはり『往生要集』の影響を受けている『玉造小町壮衰書』に注目してもよいだろう。作者を空海に仮託されたこの書は、路傍にたたずむ老婆が、かつては栄花を極めていたこと、しかしそれによる驕慢ゆえに落魄し、改心して極楽浄土を希求するという内容であるが、美貌で名高い小野小町は晩年に容色が衰え、諸国を流浪したというよく知られた伝説をモチーフとしており、人々の間には〈老い〉についての苦しみが知れわたっていったと考えられよう。

超高齢化社会といわれる現代にあつては、平均寿命が格段に延び、老いて死を迎えるまでの期間が相当に長いことを踏まえるならば、人間の〈老い〉およびそれに伴う〈老苦〉は、仏教で説かれる以上の重みを持つといってもよいだろう。

しかしながら、日常生活のレベルでは、年齢層による違いはあるものの、多くの場合、我々は〈老い〉をめぐる「怖れ」を自覚しにくいのではないだろうか。たとえば『徒然草』において、作者兼好は次のように云う。

生老病死の移り来ること、又これに過ぎたり。四季は猶定まれるついであり。死期はついでを待たず。前よりしも来たらず、兼て後ろに迫る。人みな死ある事知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干瀉遙かなれども、磯より潮の満つるがごとし。（第一五五段）

〈死〉の到来はきわめて迅速であることを述べる一節。ここにも「無常」としての〈死〉の認識が背景にあるといえようが、この一節に先立って、〈四季それぞれには、次に訪れる季節が内包されており、その移り変わりはすみやかであること〉が述べられている。冒頭辺において沖の方に干瀉がありながらも、気付かぬうちに潮が足下に迫っているように、死も背後に迫っているというのは、わかりやすい比喻であるが、現代に生きる我々にとって、この一節は〈死〉よりも〈老い〉にウエイトを置

いて読まれるべきかもしれない。

その意味では、現在、社会的な関心が向けられている年金問題は、将来の自分自身について思いをめぐらし、〈老い〉について思慮をめぐらす契機にはなっている。いわば、我々は〈年金問題〉という情報を与えられ、その情報を自分自身にどのように生かすかを問われていることになる。たしかに、我々は、将来自分が手にするであろう年金額がどれほどであるかを、具体的数値をもって把握することができる。しかし、実際にはそれによって〈老い〉についての「怖れ」が自覚されているとは言い難いというべきであろうし、むしろ、数値を伴った具体的な情報は、我々にとっての根本的な問題である〈老い〉への関心を希薄にするのではないだろうか。

このような情報化社会の一面をふまえつつ、小稿においては、〈老い〉をめぐる「怖れ」が、どのようにとらえられてきたかを文学作品に求めることによって、ささやかな考察を試みたい⁽¹⁾。

2 嘆きの対象としての〈老い〉

人間は自分自身の〈老い〉について自覚しにくいという。人間は身体的には一日一日の単位で、徐々に衰えていくはずだが、そうであるがゆえに自分自身の〈老い〉について自覚しにくい。しかし、ある時突然、自分の〈老い〉を思い知らされることがある。たとえば、古く万葉歌人山上憶良は、自身の老いの悲哀を、『万葉集』巻五の第804番および第805番において、次のように詠じている。

804 ^{よのなか}世間の ^{すべなきものは} ^{としつき}年月は ^{流るごとし} 流るごとし ^{とり続き} とり続き ^{追ひ来るものは} ^{ももくさ}百種に ^{迫め寄} 迫め寄
^{きた}せ来る ^{をとめ}娘子らが ^{娘さびすと} 娘さびすと ^{からたま} 韓玉を ^{たもと} 手本に ^{巻かし} 巻かし ^{よち子らと} よち子らと ^{手たづさはりて} 手たづさはりて ^{遊び} 遊び
^{けむ} けむ ^{時の盛りを} 時の盛りを ^{とど} 留みかね ^{過ぐしやりつれ} 過ぐしやりつれ ^{みなわた} 蛭の腸 ^{か黒き髪に} か黒き髪に ^{いつの間か} いつの間か ^{霜の降りけ} 霜の降りけ
^む む ^{くれなゐ} 紅の ^{おもて} 面の上に ^{いづくにか} いづくにか ^{皺が来りし} 皺が来りし ^{ますらをの} ますらをの ^{男さびすと} 男さびすと ^{つるぎたち} 剣太刀 ^{腰に取り} 腰に取り ^は 佩
^き き ^{さつ弓を} さつ弓を ^{手握り持ちて} 手握り持ちて ^{赤駒に} 赤駒に ^{倭文鞍うち置き} 倭文鞍うち置き ^{這ひ乗りて} 這ひ乗りて ^{遊びあるきし} 遊びあるきし ^{世間や} 世間や
^{常にありける} 常にありける ^{娘子らが} 娘子らが ^{さ寝す板戸を} さ寝す板戸を ^{押し開き} 押し開き ^{い辿り寄りて} い辿り寄りて ^{真玉手の} 真玉手の ^{玉手さし交へ} 玉手さし交へ
^{さ寝し夜の} さ寝し夜の ^{いくだもあらねば} いくだもあらねば ^{手束杖} 手束杖 ^{腰にたがねて} 腰にたがねて ^{か行けば} か行けば ^{人には厭はえ} 人には厭はえ ^{かく行けば} かく行けば
^{人に憎まえ} 人に憎まえ ^{老よし男は} 老よし男は ^{かくのみならし} かくのみならし ^{たまきはる} たまきはる ^{命惜しけど} 命惜しけど ^{為むすべもなし} 為むすべもなし

反歌

805 ^{ときは}常磐なす ^{かくしものがもと} かくしものがもと ^{思へども} 思へども ^{世の事理なれば} 世の事理なれば ^{とど} 留みかねつも

この歌の末尾には「神龜五年（728年）七月二十一日」の日付が記されているが、山上憶良69歳の時にあたる。冒頭で〈世の中で何ともいたしかたないものは、歳月が流れ去り、引き続いてさまざまものが襲いかかる〉とし、美しい娘たちも勇ましい男たちも、たちまちに老いさらばえることを詠じている。作者憶良がこのような〈老い〉を自覚したのは、末尾の〈いつの間にか杖を腰にあてがい、

あちこち出歩くと人には憎み嫌われる」ということが、おそらく現実の体験であったことによるのであろう。「老よし男はかくのみならず」すなわち「老いた男とはこんなものらしい」という句には、老人としての扱いを受けることによって、自身の老いを認めざるえない悲哀がにじみ出ているのである。

注意されるのは、「老い」が、長歌における冒頭部分「すべなきもの」、反歌における「世の事理」として受け入れざるをえないものとしてとらえている点であろう。

時代は降って、鎌倉時代に編纂され、広く流布した仏教説話集『宝物集』においても、

人つひに老いおとろふる事有り。貴賤賢愚を嫌はず。黒き髪は白くかはり、赤き唇は色を失ひ、額には渭浜の波をたたみ、眉には商山の月をたれて、骨こはく腰くぐまり、眼くらく、耳おぼろ也。甘き味はひ苦く変はり、やはらかなる水こはく成りて、万事心になはずして、一切の人すろに恨めし。若きは頼み有り、老いたる人あるを見れば、老いはたのしみなし。老いて久しき人なきが故に、是を老苦と云ふ。心ある人は、誰か歎かざるはある。 (七巻本『宝物集』巻一)

という一節が見え、老化現象の例示と、老いに対する嘆きが示されている。人が老いることにともなう次第に身体の変化をきたしていく現象は、科学的・医学的知識に乏しい古代社会の人々にとっては、おそらく不可思議な、ただ嘆くことしかできない、抗うことのできない「怖れ」として受けとめられていたことになろう。

しかしその一方で、自身の「老い」という境遇に抵抗しようとした者もいた。『平家物語』巻七に「実盛」と題された章段がある。

寿永二年(1183)五月、加賀国篠原において、平家方は木曾義仲と合戦に及ぶが敗北する。その合戦において、平家方の武将齋藤実盛は、一人陣中にとどまり、義仲方の手塚太郎光盛と戦い、討ち取られた。討ち取った首が源氏方にもたらされ、実盛であることが確認され、七十余歳であることが明らかになった。首実検の際、実盛の旧友である樋口次郎兼光は、かつて実盛が述べていた言葉を一同に紹介する。

六十にあまッていくさの陣へむかはん時は、びんぴげをくろう染てわかやがふと思ふなり。其故は、わか殿原に争ひてさきをかけんもおとなげなし。又老武者とて人のあなどらんも口惜かるべし。

すなわち、年老いた姿で若武者の先を争うのも思慮分別に欠け、老武者と侮られるのも悔しいので、六十を過ぎていくさに臨む際は鬚髭を黒く染めて若々しくしたいというのである。実際、首を洗わせると、染めていた墨が落ち、白髪になったという。

ここには、恥辱を嫌い名誉を重んずる武士という特殊な立場に置かれた一人の老人の最期のさまが

描かれている。たしかに、斎藤実盛は武士としての見事な最期を遂げたということになるだろう。しかし、〈老い〉という避けがたい境遇を、敵方に見せまいとすることは、うがった見方をすれば、自分自身を偽り、自身の老いをとりつくろうとしていることではないだろうか。いわば、〈老い〉を自分自身の問題することを拒んでいるのである。

ところで、〈老い〉という境遇から遠ざかろうとする点で思い起こされるのが、『徒然草』第七段の後半部分の一節である。

住みはてぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせむ。命長ければ恥多し。長くとも、四十よそぢに足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。

そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に交はらむことを思ひ、夕ゆふべの日に子孫を愛して、さかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみ深く、物のあはれも知らずなりゆくなむ、あさましき。

とある。「そのほど過ぎぬれば」以下の後段は、引用本文の冒頭部分の「みにくき姿」を示すものであり、作者兼好から見た人間の〈老醜〉ということになる。兼好は、そのような老醜を曝すことは無意味であること、四十歳以前にこの世を去るのが見苦しくないだろうと述べている。いうまでもなく、ここでの四十歳とは人生五十年とされた時代の年齢であり、平均寿命が八十歳余の現代においては、六十代半ばに相当する年齢といえようか。そのあたりの年齢を過ぎると、人間は羞恥心が欠如し、欲望の増長が生じるという心のあり方を問題視した兼好の指摘は、実には的確な指摘であるが、そのような「みにくき姿」を迎える前の死が望ましいというのは、これも〈老い〉からの逃避といえるだろう。

3 美化される〈老い〉

室町時代から江戸初期にかけて、庶民層に広く流布した物語草子が数多く存在する。特に二十三編の作品を収め、江戸中期に出版された『御伽草子』中の一編「浦島太郎」には、周知のように浦島太郎が玉手箱を開け、たちまち老人になるという、老いの問題を考える上で恰好の一場面がある。

さて浦島は、一本ひともとの松の木陰に立ち寄り、あきれはててぞゐたりける。太郎思ふやう、亀が与へしかたみの箱、あひかまへてあけさせ給ふなど言ひけれども、今は何かせん、あけて見ばやと思ひ、見るこそくやしかりけれ。この箱をあけて見れば、中より紫の雲三すぢ上りけり。これを見れば、二十四五の齢もたちまち変りはてにける。

「浦島太郎」の伝説は、古く『日本書紀』（雄略天皇二十二年七月条）・『丹後国風土記』・『万葉集』（巻九）等にも見えている。いずれも太郎が助けた亀が女性に変じ、太郎を仙境へと導き、二人は夫婦と

なるが、太郎が両親恋しさに故郷に戻ると、そこではすでに何百年もの時間が過ぎていたというのが、基本的な話型である。ここに仮託されているのは、恋する人間にとっては、その相手が神であろうと傍目のことは目に入らなくなる、ふと冷静になって両親や身近な人々へ思いを馳せる時には、すでに老いさらばえた身になっている、という現実であろう⁽²⁾。

しかし、『御伽草子』「浦島太郎」では、これに続いて、

さて、浦島は鶴になりて、虚空に飛び上りける。

という、不老長寿のシンボルである鶴として再生し、さらには、

浦島太郎は、丹後国に浦島の明神とあらはれ、衆生済度し給へり。亀も同じ所に神とあらはれ、夫婦の明神となり給ふ。めでたかりけるためしなり。

として閉じられる。古代における浦島伝説は、すでに見たような〈老い〉を嘆きの対象としてとらえること、あるいは〈老い〉を自身の問題とすることを拒もうとする志向をとどめているのに対し、『御伽草子』の段階では、〈老い〉は神になるプロセスとして位置づけられているといえよう。一般に、昔話に描かれている老人たちは、現実的な厳しい生活状況をうかがわせることなく、悠々自適に、のどかで幸福感あふれる暮らしぶりであるかのように描かれていることが多いが、現実的には、そのような老人たちの暮らしぶりはいずれありえないはずであり、それら『御伽草子』や昔話が、庶民の階層に根ざしたものであることをふまえるならば、老人たちの悠々自適な暮らしぶりは、現実の悲哀から目をそらし、現実には叶えがたい一つの理想として、〈老い〉を美化しようとする庶民的な発想が存在しているといえるだろう。

また、歴史物語の『大鏡』の語り手として、190歳の太皇太后と180歳の夏山繁樹が登場し、藤原氏をめぐる「歴史」の目撃者として設定されていることも、老人を神格化し、超越した存在とする点で重要である。

4 近代文学における〈老い〉

近代文学における〈老い〉の問題は、明治・大正時代にはあまりとり上げられておらず、多くの作品でとり上げられるようになるのは、昭和に至ってからであるという⁽³⁾。たしかに、明治・大正時代の作家たちが、若い世代を中心としていたことをふまえれば当然であろう。若い作家たちが文学に求めたものは、今まさに自分たちはいかに生きるべきかということであり、彼らの関心は自分たちの行き着く先へは向けられなかったわけである。

昭和にいたって、ようやく〈老い〉の問題が作品にとり上げられるようになるが、それは明治・大

正時代に若かった世代の作家たちが、〈老い〉を意識する世代となったことにかかわるであろう。特に戦後の昭和30年代になって、〈老い〉をテーマにした作品が多く見られるようになるが⁽⁴⁾、そこでは〈人間にとっての老い〉そのものに関心が向けられ、問題化されている傾向が強いように思われる。以下、二、三の作品に注目し、その特徴について触れてみたい。

川端康成『山の音』（昭和24～29年）は、全16章からなる長編小説であり、「老人文学」と評されてきた作品である。この時の川端は50～55歳、老いを意識しはじめる年齢であったといえる。

主人公尾形信吾は62歳の会社重役である。鎌倉に住み、一つ年上の妻保子と、息子修一、嫁の菊子と同居している。経済的には恵まれていると思われるが、背景には複雑な家庭内の人間関係がある。修一と菊子は、結婚して2年足らずであるが、修一には愛人がおり、二人の仲はしっくりいかない。また、結婚していた信吾の娘、相原房子は、麻薬常用者である夫とうまくいかず、二人の子供を連れて信吾のもとに帰ってくる。

一方、信吾は、少年の頃、早世した保子の姉に好意を抱いていたが、嫁の菊子が家に来てから、菊子を見て、時々保子の姉を思い出すきっかけを得る。一見どこにでもありがちな普通の家庭の日常のように見えながら、息子の嫁に恋心を抱く舅、老妻・息子・出戻りの娘らの心理的葛藤や人間模様を描くことが、この作品のモチーフとなっている。

〈老い〉の問題として、この小説をとらえる時、その冒頭部分において、主人公の信吾が、「五日前に暇を取った女中」のことが思い出せずに「軽い恐怖」を覚えるというくだりが、まず注目されよう。初老の人間にとって、ほんの間近のことでさえも、記憶の網の目からこぼれ落ちていくことは、ごくごくありがちなことであろうが、〈人間にとっての老い〉を強く印象づける場面は、第一章の次の一節であろう。

八月十日前だが、虫が鳴いている。

木の葉から木の葉へ夜露の落ちるらしい音も聞こえる。

そうして、ふと信吾に山の音が聞こえた。

風はない。月は満月に近く明るいが、しめっぽい夜気で、小山の上を描く木々の輪郭はぼやけている。しかし風に動いていない。

信吾のいる廊下の下のシダの葉も動いていない。

鎌倉のいわゆる谷の奥で、波が聞こえる夜もあるから、信吾は海の音かと疑ったが、やはり山の音だった

遠い風の音に似ているが、地鳴りとでもいう深い底力があつた。自分の頭のなかに聞えるようでもあるので、信吾は耳鳴りかと思って、頭を振ってみた。

音はやんだ。

音がやんだ後で、信吾ははじめて恐怖におそわれた。死期を告知されたのではないかと寒気が

した⁽⁶⁾。

夜中、ふと目覚めた信吾が聞いたという〈山の音〉が何であるかについては明確に説明されていない。しかし、信吾には確実に聞こえた〈何か〉であった。確実に聞こえたが、それが何であるかわからない。だからこそ、数日前に辞めた女中の名前が覚え出せないという「軽い恐怖」を覚えていた信吾は、ここで重大な〈恐怖〉におそわれ、究極の〈恐怖〉であるはずの〈死〉を意識したのである。第一章の末尾に、夕食後の家族のやりとりを描いた、次のようなくだりがある。

信吾はしばらくだまっていてから言った。

「このごろ少し耳が変になったのかもしれないね。このあいだ、夜なかにそこの雨戸をあけて涼んでいると、その山の鳴るような音が聞こえてね。ばあさんはぐうぐう寝てるんだ。」

保子も菊子も裏の小山を見た。

「山の鳴ることってあるんでしょうか。」と菊子が言った。

「いつかお母さまにうかがったことがありますわね。お母さまのお姉さまがおなくなりになる前に、山の鳴るのをお聞きになったって、お母さまおっしゃったでしょう。」

信吾はぎくつとした。そのことを忘れていたのは、まったく救いがたいと思った。山の音を聞いて、なぜそのことを思い出さなかったのだろう。

信吾は、すでに〈山の音〉が〈死〉につながるものであることを知っていたはずだった。彼は、それを忘れてしまっていた。信吾にとって、自分が耳にした〈山の音〉は、〈死〉を意識させる〈恐怖〉であるとともに、自身の〈老い〉を自覚させられた現象ということでもあろう。

この〈山の音〉は、作品世界の底流となって響いていくが、〈人間の老い〉およびそれにとまなう〈死への恐怖〉を見事に象徴しているといえるだろう。

ところで、『山の音』において、尾形信吾は62歳であった。現在、職種による違いはあるにせよ、多くの職場では60歳が定年とされ、この年齢を境として、いわゆる「老後」が始まると考えるとするならば、62歳という年齢で〈老い〉や〈死への恐怖〉を抱くとしても、とりたてて不自然なことではないだろう。年金の財源が不足によって支給時期を遅らせる必要が生じたことや、何よりも平均寿命が伸びたことにより、第一線から退く年齢については改めて検討されるべき時期に至っているとはいえ、〈老いへの怖れ〉や〈死への恐怖〉が、年齢という「具体的な数値」によってもたらされることは、十分ありえることだろう。それは、たとえば我々の健康状態が、さまざまな検査項目において示される数値によって決定されることに似ている。標準値とされる数字との比較によって、我々は自身の健康について一喜一憂しがちである。しかし、はたして検査結果を示す具体的な数字が、一人ひとりの健康状態を決定しうるのかといえ、必ずしもそうではないだろう。数値的には問題がある場合であっ

でも、自分自身が健康であるか否かを決定するのは、あくまで個人の意識の問題であろう。

とかく我々は数値というものに左右されがちであるが、〈老い〉の問題を、年齢という「具体的な数値」との関わりから強く意識させる作品が、深沢七郎『檜山節考』（昭和31年）ではないだろうか。『檜山節考』は、前近代とおぼしき信州のとある貧しい山村を舞台に、一人の老婆を主人公として、その壮絶な生きざまを描いた作品である。その村では「70歳」になると「檜山へ行く」と称して、檜山という山に捨てられねばならない掟がある。主人公の老婆おりんは、その過酷な宿命を潔く受け入れ、息子辰平に背負われて檜山に登る。折しも雪が降り始め、おりんは山にとどまり、厳かな最期を迎える。

この作品は、いわゆる「棄老伝説」をふまえているが、どの時代を意識しているのかは明確ではなく、またこの作品において、それを問う必要はないだろう。というのも、この食料の乏しい極貧の村では、いかに食い扶持を減らすかが問題なのであり、それがいつのことなのかという具体的な時代を設定することは無意味であるからだ。

この村で「70歳」以上の年齢の老人が不要とされるのは、その年齢の人間が、もはや労働力とはなりえないことを意味しているのであろうが、近代・前近代を問わず、そのような年齢としての「70歳」は妥当な数字ということにはなるだろう。

主人公おりんは69歳。妻に先立たれた息子の辰平と、4人の孫と暮らしているが、69歳とは思えない健康な老人である。一家の家事全般を切り盛りし、歯も丈夫でいまだに一本も抜けていない。

しかし、いかに健康であろうとも、70歳になれば檜山へ行かねばならないというのが村の掟であり、おりん自身も当然そのつもりでいる。そのために、自分が檜山へ行く前に、男やもめである息子辰平の後妻を決め、70歳という年齢にふさわしくするため、自ら丈夫な歯に石を当てて折ってしまうなど、自分自身をこの村において、望ましいとされる老人のあり方にあてはめてしまうのである。すなわち、自分の個性を切り捨て、村の掟である「70歳」という具体的な数値に支配されているのである。

だが、おりんには自分の個性に相反する村の掟に従うことについて、全く躊躇することも恐れることもなく、むしろこれを喜んで甘受している。そこがこの作品の見所であろう。実際には、おりんは70歳になる前——すなわち、正月を迎えて歳を1つとる前の12月中に檜山へ向かう。それは、孫のけさ吉の嫁の松やんが身ごもり、おりんにとって曾孫が生まれることがわかり、この村では曾孫を見るということも嘲笑の対象になるからであった。

このような「70歳」という年齢に自分を合わせ、自ら定められた〈死〉を受けとめる主人公おりんは、たしかに強い意志を持っている。おりんとほぼ同時に檜山に向かった銭屋の又やんは、息子に背負われながら、激しく抵抗し、生への執着を見せている。

又やんは昨夜は逃げたのだが今日は雁字搦みに縛られていた。芋俵のように、生きている者ではないように、ごろっと転がされた。俵はそれを手で押して転げ落とそうとしたのである。だが又

やんは縄の間から僅かに自由になる指で倅の襟を必死に攔んですがりついていた。倅はその指を払いのけようとした。が又やんのもう一方の手の指は倅の肩のところを攔んでしまった。又やんの足の先の方は危うく谷に落ちかかっていた。又やんと倅は辰平の方から見ていると無言で戯れているかのように争っていた⁽⁶⁾。

一方、息子辰平に背負われて、檜山へ入ったおりんは次のように描かれている。

おりんは庭の上ですっくと立った。両手を握って胸にあてて、両手の肘を左右に開いて、じっと下を見つめていた。口を結んで不動の形である。帯の代りに縄をしめていた。辰平は身動きもしないでいるおりんの顔を眺めた。おりんの顔は家にいる時とは違った顔つきになっているのに気がついた。その顔には死人の相が現れていたのである。

又やんとおりんにおける、「70歳」という年齢によって示される〈人間の老い〉、およびそれに付随する〈死〉は、まったく異なった形で示されている。世俗的立場に立てば、又やんのような最後のあがきが真実であろうし、それとは対照的に一切の〈怖れ〉を持たないおりんの行動は、現実離れしているように映る。しかし、おりんを山に置いた後、辰平が山を下る時、縁起がよいとされた雪が降ってきたことを喜び、戻ってはいけないという掟を破り、辰平はおりんのもとに引き返した。

おりんは頭を何回も横に振った。その時、辰平はあたりにはからすが一ぴきもいなくなっているのに気がついた。雪が降ってきたから里の方へでも飛んで行ったか、巢の中にでも入ってしまったのだらうと思った。雪が降ってきてよかった。それに寒い山の風に吹かれているより雪の中に閉ざされているほうが寒くないかも知れない。そしてこのまま、おっかあは眠ってしまうだろうと思った。

おりんは70歳とは思えぬほどに健康であったから、この時の彼女に肉体的な死期が訪れていたとは考えられない。しかし、息子辰平の目には、おりんに死相が見えていた。おりんは、村の掟で定められた、山へ行かねばならない「70歳」という具体的な年齢を自覚することにより、山へ行くのは当然であること、すなわち彼女には〈老い〉はもとより〈死〉についての〈怖れ〉も全く存在しないことがわかる。さらに、ここの最後の場面において、あたりに群がっていた無数のからすが一切見えなかったという点にも注意してよいだろう。生への激しい執着を見せた銭屋の又やんが谷底に落とされる時、それを目撃した辰平は、「谷底から竜巻のように、むくむくと黒煙りが上ってくるようからすの大群が舞い上がって」くるのを見、辰平は「からすの餌食か」と思ったとある。一方、おりんの場合は、自ら選んだ運命を恐れずに山にとどまった。からすが姿を消したというのは、そうしたおりんの潔さが神々しいものであったことによるのであろう。その意味では、おりんはすでに神の域に達していた

ことになる。『御伽草子』『浦島太郎』において見たように、日本古来の文化には、〈老いること〉が〈神になること〉という発想があるが、『檜山節考』の結末部分には、日本古来の発想が息づいているといえよう。

戦後10年ほどの間に発表された『山の音』および『檜山節考』が、老いの時期を迎えた人間にとっての〈老い〉を描いているのに対し、高度経済成長期の昭和47年に発表された有吉佐和子『恍惚の人』は、老人の周囲にいる人間にとっての〈老い〉を問題化した長編小説である。

東京近郊で暮らす立花家は、夫信利はサラリーマン、妻昭子もパートの仕事をもち、敏は受験生という典型的な核家族である。敷地内には信利の両親が別宅に住んでいる。冬のある日、信利の75歳の母親が急死したことによって、84歳の父茂造が異様な行動をとっていることがわかる。現在の老人性痴呆症であるが、当時はまだ社会的に認知されていなかった⁽⁶⁾。以後、立花家の主婦である昭子が、茂造の介護に明け暮れる様子を中心に、なまなましい痴呆症の現実や、介護する側のさまざまな問題、福祉政策のあり方などに触れつつ、茂造を看取るまでの経過を描いている。

この作品を読む者にとって、もっとも衝撃的なのは、老人性痴呆症の具体的な症状が、きめ細かに描かれていることであろう。徘徊癖、異常な食欲、夜中に目覚めて暴れるなど、すでに老人性痴呆症の症状として周知されていることではあるが、それらを具体的な文字としてたどる時、やはり衝撃的である。しかし、茂造老人の周囲をとりまく人々にとっては、わずかではあるが〈人間にとっての老い〉という根本的な問題に対しても目配りがなされている。たとえば、

毫碌している父親は、信利がこれから生きていく人生の彼方に立っている自分自身の映像なのだという考えが、払っても払っても頭の中から消えない。老いるということの究極は、これか、と思う。それは死よりも昏く、深い絶望に似ている。(新潮文庫 p59)

近年、彼は物忘れがひどい。思い出すのに時間がかかる。若いときは、決してこんなことはなかった。記憶力には自信があった。こうして物の弾みに思い出すというのは、茂造が突然昔のことを思い出して、老婆が馬に蹴殺されたと言い出したのと同じ老化現象ではないのか。信利は思わず半身を起し、何か幻聴を聞いたあのような不安に襲われていた。(新潮文庫 p173)

などである。いずれも信利の思いを綴った一節であるが、特に後者の一節は、『山の音』における信吾の思いと同質のものであろう。このように、近代文学が描いてきた〈老いることへの恐れ〉という問題提起は、『恍惚の人』においても見ることはできる。しかし、そのような根本的な問題への関心は、この作品の場合、インパクトのある老人性痴呆症特有の症状の描写によって、霞んでしまっているように思える。

2004年5月に、国立高崎病院附属看護学校1年生41人に対して、『恍惚の人』の読後感について、次

のようなアンケートを行った。

問1 この作品を読んで、「こわさ」「おそろしさ」といったものを感じたか。

問2—1 (問1で「感じた」と答えた者へ)「こわさ」「おそろしさ」とは具体的にどのようなものか。

2—2 (問1で「感じなかった」と答えた者へ)「こわさ」「おそろしさ」を感じなかったのはなぜか。

問1で「おそろしさを感じた」と答えた者は38名、3名が「感じなかった」と答えた。「感じなかった」とする3名の、問2—2において述べた理由は、

- ・老人性痴呆症についての知識があり、皆がそのように考えれば特別なことではなく、現在ではある程度の対応策がなされているから。
- ・痴呆症は特別なことではなく、自分にも身内に対処した経験があったから。
- ・誰にでも平等に訪れるものであるから。

というものである。たしかに、「老人性痴呆症」という病名が存在しなかった昭和47年当時に比べれば、この作品の内容は、さほど特別なことではないということであろう。

しかし、問1で「おそろしさを感じた」とする38名のほとんどは、問2—1において、具体的な痴呆症の症状について「おそろしい」と答えており、〈老いることへの恐れ〉と答えた者は2名に過ぎなかった。

現在、老人性痴呆症に関しては、『恍惚の人』発表当時に比べて、格段に人々の理解は向上している。これはまさしく現代における情報化のたまものである。しかし、このような個別化した情報の氾濫は、人間にとっての根本問題である〈老いるということへの恐れ〉を失わせることにつながるのではないだろうか。

5 むすび

以上のように、はなはだ粗漏な形ではあるが、日本文学の作品をたどることを通して、〈老い〉の問題をたどってみた。

〈老い〉を自分自身の問題として考える時、年齢が高くなるにつれて、問題は深刻化するであろうが、それは近年の個別化した情報が大きく関わっているように思える。すでに述べたように、人間は個別具体化された〈数値〉に弱い。具体化された〈数値〉を示すことによって、ものごとの基準をとらえることの功罪を考える必要があるだろう。

注

- (1) 『日本国語大辞典』(第2版)によれば、「おそれ」の項に〈心配すること。何か悪い結果を予想しての気づかい。不安。心労〉という語義が載る。これによれば、〈老い〉についての怖れとは、まさしく〈将来に対する不安〉をも意味することになろう。それは、そのまま現代における一つの〈怖れ〉の問題のとして読みかえることができるであろう。
- (2) 岡部伊都子『御伽草子を歩く』(新潮社、1973)
- (3) 「座談会：昭和文学に描かれた「老い」」(国文学解釈と鑑賞 1989.1)
- (4) 「平成16年版 高齢社会白書」(内閣府)によれば、我が国の平均寿命は、昭和22(1947)年には男性が50.06歳、女性が53.96歳であったが、55年後の平成14(2002)年には男性が78.32歳、女性は85.23歳と大幅に伸びている。
- (5) 引用本文は新潮文庫による
- (6) 昭和47(1972)年当時の平均寿命は、男性70.1歳、女性75.5歳である。昭和39(1964)年の男性61.2歳、女性72.3歳に比べて大きく伸びている。小説の中では、男69歳、女74歳とある。